

栃木県におけるヨタカの生息状況

○平野敏明（バードリサーチ）・野中純（日本野鳥の会栃木）・石濱徹（日本野鳥の会栃木）・
長野大輔（日本野鳥の会栃木）・手塚功（日本野鳥の会栃木）・川田裕美（日本野鳥の会栃木）

ヨタカ *Caprimulgus indicus* は、日本では九州、四国、本州、佐渡、北海道で繁殖する夏鳥である。本種は、1980年代になると日本における生息状況が悪化し、2006年に改訂された環境省のレッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類（VU種）に選定された。しかし、本種は日没後から早朝にかけて活動するため、日中の観察では詳しい生息状況を明らかにできない。そのため、日本では、本種の詳しい生息調査はほとんど実施されておらず、現在の生息状況がわかっていない。本種の生息状況の現状を明らかにし、生息環境などとの関係を解明することは、本種の保護方策を立案し実施する上で不可欠である。そこで、演者らは、栃木県における本種の生息分布や個体数、大まかな環境区分との関わりについて調査した。

調査は、おもに2011年（4か所のみ2012年）の5月中旬から7月中旬にかけて、栃木県内の森林が多く残る地域で、おもに日没後30分以降または日の出前30分以前の2時間に、録音再生法を併用した30分前後の定点調査を1回実施した。得られた結果は、調査地の標高区分および大まかな環境区分と生息の有無を χ^2 検定で危険率5%で解析した。調査地の標高は、300m未満、300~600m、600~900m、900m以上の便宜的に4区分に、環境は森林、森林と耕地（宅地を含む）、森林と湖沼、森林と藪（伐採地や自然草原を含む）、森林と人工草原（ゴルフ場、放牧地など）の大きく5つに分けられた。

栃木県内の合計146地点で調査を実施したところ、46か所で少なくとも51羽のヨタカの生息を確認した。生息が確認された調査地数は、標高区分で有意に異なっていた。標高300m未満の生息地は、調査地の割合から算出された期待値より著しく少なかったが、ほかの標高区分では期待値より多かった。次に、生息が確認された調査地数は、全調査地を対象とした各環境区分の割合と比較すると各環境区分で有意に異なっていた。期待値と比較すると、生息地数は湖沼や藪を含む森林で期待値より著しく多く、耕地や人工草原を多く含む森林では期待値より著しく少なかった。ヨーロッパヨタカ *C. europaeus* は、若齢植林地や森林内の空き地を生息環境として選好することが報告されている。本研究での伐採地や低木が散在する草原を含む「森林と藪」の環境区分で生息地が多かったのは、本種の選好する植生に起因するものと考えられる。一方、ダム湖など湖沼を含む森林に多かったのは、食物資源と関係している可能性が考えられる。また、300m未満の調査地で生息地が著しく少なかったのは、この標高区分にはヨタカの生息地が少なかった環境区分である耕地や人工草原を含む森林が多かったことが考えられる。なお、1997年に実施した栃木県のヨタカ調査と同じ調査地同士で生息の有無を比較したところ、本研究では1997年に生息が確認された23か所のうち8か所で生息が確認されなくなり、有意に減少した（符号検定 $P<0.05$ ）。今回生息が確認されなくなった調査地の多くは、300m未満の標高区分であった。したがって、この標高区分の調査地では、さらに本種の生息状況が悪化した可能性が示唆された。日本における本種の生息状況の現状を把握するためにも、全国規模の生息調査が必要と考えられる。